



野天ジムと化す橋 写真提供:佐伯泰英事務所

ベトナムを再訪して

佐伯通信

2017年8月(平成29)
第39号
発行
佐伯泰英事務所
担当/文藝春秋
禁・無断転載

ベトナムの古都フエを訪ねた。ベトナム最後の阮王朝の都の人びとはえらく勤勉だった。宮廷を中心にした旧市街と対岸の商業地区の新旧街とを二分してフオン川が流れ、二つの地区をチェオンティエン橋が結んでいる。この鉄橋は一八九九年にフランスによって

架けられた。設計者はエツフェル塔と同じギユスターヴ・エツフェルだそうだが、そう言われれば二つの建築物は雰囲気がよく似ている。数は少ないが車や、ホンダと総称されるバイクや自転車の群れ、天秤棒で野菜などを入れた籠を担ぐ女の物売りなどが通る車線の両側には幅一メートルほどの歩道が設けられている。早朝四時を回ると橋の歩道は、筋トレやストレッチをする男女の野天ジムと化する。日中の暑さを避けての橋上ジムだ。武骨な鉄筋構

佐伯泰英 / 近刊のお知らせ

12月 25日	11月 15日	10月 11日	9月 14日 5日
『故郷はなきや』	『鎌倉河岸捕物控 31』 <small>〔佐伯通信〕第40号が入ります。 〔初版の初回出荷分のみ抜き込み〕</small>	『浅き夢みし』	『空也十番勝負 青春篇 恨み残さじ』
		『吉原裏同心抄』	『酔いどれ小籐次(決定版) 14 冬日淡々』
			12/5 『祝言日和』 11/9 『旧主再会』 10/6 『新春歌会』

近刊・作品情報はこちらでもチェックできます。
<http://www.saeki-bunko.jp> 佐伯泰英 ウェブサイト 検索

2017年の「佐伯通信」は、佐伯泰英事務所が下記出版社の協力のもと発行いたします。
株式会社文藝春秋、株式会社角川春樹事務所、株式会社双葉社、株式会社光文社、株式会社新潮社



松本大輔

文藝春秋文庫
『酔いどれ小籐次』
シリーズ担当

犬に引かれて……

今年も2カ月連続刊行の新・酔いどれ小籐次。お楽しみいただいておりますでしょうか。

本作『船参宮』、いや～、時代小説で描かれる旅ってやっぱり最高ですね！
本作の執筆にあたり、佐伯先生は愛犬みかんちゃんと一緒に伊勢に赴かれました。

本作にはその取材の成果が存分に盛り込まれています(佐伯通信38号の写真は、取材の際のものです)。

いっぽう原稿を読んだカバー装画担当の横田美砂緒さんも、「私も行きたくくなりました」とおっしゃり、ご多忙のさなか一泊二日の強行軍で抜け参り(?)。時代は変われど「お伊勢さま」の吸引力は健在のようです。皆さまも、本作片手に伊勢散策、なんて楽しいかもしれませんよ。

右ページ下段にあるとおり、文春文庫では、新・酔いどれ小籐次2カ月連続刊行を記念し、プレゼント企画を実施。「これまでの時代小説にはあまりなかったグッズ」を考えてみました。もちろんグッズにあしらわれるのは横田さんのイラスト。小籐次特設サイト (<http://books.bunshun.jp/sp/kotouji>) では実物の写真もご覧になれます!

(「酔いどれ小籐次」シリーズは、別宮ユリア・松本大輔で担当しています)

造は近くで見ると車道と歩道の間に隙間があって、十数メートル下に水面が見える。そんな斜めの鉄骨の梁にぶら下がって懸垂まがいの動きや腹筋運動に励むフエの人びとの勇気(ひとつの間違えば流れに落下)には朝から圧倒される。さらに狭い橋上ジムをジョギングやランニングをする人びとが上手にストレッチ組をすり抜けていく。娘が橋上ジムの人びとにレンズを向けると、俄然筋トレに力が入る。そうこうするうちに南シ

ナ海から太陽が昇り、西のラオス国境の山並みに日が当たって、大河上のジムは終わりを迎える。そうすると旧市街の橋の袂にあるドンバ市場の賑わいが風を伝って橋上まで聞こえてくる。夜にはライトアップされて橋は、また違った顔を見せてくれる。私たちには王宮見物より橋上ジムや夜店と化す橋が親しみやすく、元気を貰った。

出版社からのお知らせ

新・酔いどれ小籐次シリーズ

2カ月連続刊行記念プレゼント!

『夢三夜』『船参宮』両作をお買い上げの方の中から抽選で、特製グッズをプレゼントいたします。

賞品はブックカバー、トートバッグ、タンブラー、キーホルダーの4種!

詳しくは『夢三夜』『船参宮』の帯をご覧ください。

文春文庫